

兵庫県立神出学園
創立20周年記念出版

よみがえる子ども達
～子どもたちはこうして元気になった～

はじめに

兵庫県立神出学園長 小林 剛

この冊子は、兵庫県立神出学園がこの秋、開設20周年を迎える記念の節目に当たって、編集したものであります。

本学園は1994年秋、全国初の10代後半の不登校を中心とした、学校適応に困難を感じた子ども・若者達の自分づくりと生き方探しの学園として開設されました。以来20年間学園スタッフは、ひたすら子ども・若者達の悩める心に寄り添い、希望と生き甲斐を紡ぐ支援に総力を上げて努力して参りました。

この秋の修了生を含めて、これまで学園を修了した子ども・若者達は総勢500人を越える数になりました。それぞれの修了生の修了後の生き方はさまざまですが、殆どの子ども・若者達は心身に元気を取り戻し学校や社会に巣立っていきました。入学当初の不安な姿を想います時、進路を見つけ、巣立っていく修了生達の姿はいつも感動的でありました。いまま不登校の子ども達の数は、兵庫県内においてもかなりの数にのぼっています。それだけに、不登校支援に20年間取り組んできた神出学園の蓄積された支援のノウハウは、県内で不登校支援に当たっている方々をはじめ関係機関に対して、さまざまな知見を提供することができるのではないかと考え、学園創立20周年を記念して本冊子を編集しました。どうか本冊子が、皆様の不登校支援のお役にたつことができれば神出学園としてこの上ない喜びであります。

この20年間、学園は多くの方々に支えられて今日を迎えました。特に兵庫県企画県民部県民文化局青少年課・兵庫県青少年本部をはじめ多くの関係機関の皆様のご支援に心から感謝申し上げますとともに、今後ともご支援をいただきますようお願い申し上げます、記念出版のご挨拶とさせていただきます。



目次

はじめに	
神出学園はこんな子ども達を支援してきました	2
神出学園は宿泊型の支援施設です	3
神出学園の子ども支援は専門家のコラボが特徴です	4
学園に入学してくる子どもの心はこんな心です	5
学園の子ども支援はここからはじまります	6
不登校支援を本格的に進めるには、一人ひとりの全体像を把握することが大切です	7
一人ひとりの子どものアセスメントをもとに支援の方針を立てます	8
子どもの生活支援は不登校を乗り越えるための大切な支援です	9
学園の心理的支援は心の安定と学園生活への適応の基本です	10
ソーシャルスキルを高める心の支援も大切です	11
子どもの成長・発達の中核的支援としての教育的支援プログラム	12
学園の教育的支援プログラムの特徴	13
福祉体験プログラム	14
文化創造体験プログラム	15
進路・学習支援プログラム	16
生きがい探索プログラム	17
乗馬体験プログラム	18
アニマルセラピーとその効果	19
食育・料理体験プログラム	20
祭りやイベントプログラムの意味	21
学園の保護者支援プログラム -ペアレントトレーニング-	22
学園に入学した子ども達の声	23
学園を修了するに当たって残してくれた子ども達の声	24
「学園で子どもがよみがえった」-保護者の声-	25
学園の子ども達の思いから生まれた歌「神出の僕ら」	26
学園修了の子ども達はどのように羽ばたいた	27
子ども達に学園生活の評価を聞きました -入学してよかった-	28
子ども達は学園生活をどう評価しているか -学園生活で自分が変わった-	29
学園の不登校支援の蓄積を県内外に発信	30
神出学園の学外連携支援の諸活動	31
ひきこもり支援の「1日交流体験」活動	32
おわりに	

神出学園はこんな子ども達を支援してきました

今や学校に行けない不登校の子ども達は、膨大な数になっています。兵庫県における2011年の不登校の児童・生徒の数は小学校で789名、中学校で4228名、高校で766名となっています。こうした子ども達は学校に行きたい気持ちがありながらも学校には行けない子ども達なのです。神出学園に入学してくる子ども達は、こうした子ども達なのです。この学園が構想された当時は、中学校で不登校となって高校にも行けなくなった子ども達の行き場は公的にはありませんでした。また、高校に進学したものの、不登校となり、中退せざるを得なくなった子ども達もまた、行き場がありませんでした。ここに着目して全国初の公立の不登校支援の施設として開学したのが兵庫県立神出学園であります。

兵庫県立神出学園がこの20年間入学対象にしてきた子ども達は、およそ次の条件を満たした子ども達であります。

- 兵庫県内の小・中学校で不登校となり、中学校卒業後高校にも進学できず、また就労もせず、そのまま家庭などで生活している子どもで、年齢は20歳未満の者
- 兵庫県内の高校に入学するも、途中で不登校となり、中退してしまい、そのまま家庭などで生活している20歳未満の者
- 高校を卒業するも、就労も就学もしていない20歳未満の者
- 高校に在籍している20歳未満の者

これらのいずれかの条件を満たし、自分の生き方や進路を見つけたいという意欲を持ち、寮での共同生活が可能な子ども。

神出学園はこうした子ども達に「生きる喜び」、「学ぶ楽しさ」、「進路探し」などのプログラムを提供し、自分探しと自分づくりを支援する施設です。



神出学園の子ども支援の大きな特徴の一つは、寮で生活することが基本になっていることです。このことについて学園としては、いくつかの願いを込めて、その意義を捉えています。

1 「群れる」体験ができる寮

不登校になった子ども達は、中学校や高校で生活ができなくなって、家庭にこもってしまった子ども達です。思春期という時期は人間一生の中でも、とりわけ同世代の友達が必要な時期です。学園に入学してくる子ども達は、小中学校でも、仲間と群れる体験が少なかった子ども達なので、こうした子ども達に、群れる体験をする寮生活が必要であるという思いから「寮生活」を経験することを子ども支援の基本におきました。寮の2階には、家庭でいえば、広い茶の間のような空間があります。寮の設計段階で、この空間を群れる空間として、意識して設計されました。学園生達がこの空間で、遊んだり、議論したり、時には、ぶつかったりしながら、青春のひと時を過ごし成長していくのです。



2 寮は格好の仲間づくりの場

不登校の子ども達が、2年間の学園生活を終わって修了していく時、共通に声にする言葉の中で、ひときわ多く話す言葉に「友達ができてよかった」という言葉があります。この友達づくりは、寮での共同生活が基礎になっています。

3 寮生活は青春そのもの

不登校体験を持った子ども達は、おしなべて、集団生活が苦手です。にもかかわらず、子ども達にあえて寮生活を提供する意味は、ここで友達ができ、生活を立て直し、青春を取り戻すことができるからです。そのため、学園では夜間に、共に生活する生活指導員をメンタルフレンドとして、配置しています。

神出学園の子ども支援は、対象の子どもが、不登校などさまざまな悩みや不安を抱えているということもあって、開設当初から支援のための専門家を配置しています。

1 第一は心理の専門スタッフです

不登校の子ども達は、学校へ行けなかったということで、心に悩みを抱えています。またいじめや親子関係などで、心に傷や葛藤を抱えている子どもも多くいます。こうした一人ひとりの子どもに心のケアをすることは、学園の最初の仕事です。もちろんこうした子どもの心のケアを進めていくには、心の状態をアセスメントする検査も必要です。また子どもに、ストレス対処などの心理教育も必要になります。加えて、社会的なコミュニケーションスキル(SST)も大切な支援課題になります。こうした支援は学園の心理の専門スタッフの仕事です。

2 第二は教育の専門スタッフです

不登校の子どもは、学校に行けなかったこともあって、成長に役立つための学習から遠のいてきました。教科の学習は勿論のこと、生活指導全般にわたっても課題を抱えています。こうした子どもに教育の専門家として、生活支援をしつつ、学習や体験プログラムなどを通して、働きかけ、進路支援も含めて、教育的支援を行う必要があります。これらは学園の教育の専門スタッフの仕事です。

3 第三は福祉的支援の専門スタッフです

寮における生活的支援は、若いメンタルフレンドである生活指導員の役割です。また子ども達の心身の問題については、一人ひとりの心身に寄り添い、保健師が医療福祉的支援をしています。さらに管理栄養士もまた食を中心とした福祉的支援をおこなっています。

学園ではこうしたそれぞれの専門家が協働して、一人ひとりの学園生に対して心身の総合的支援を行っています。

神出学園に入学してくる子ども・若者達の年齢は、15才から20才までの思春期後期から青年期の子ども達です。この時期は身体的には大人らしく見えますが、不登校という困難を抱え込んだ子ども達であるので、独特な心の葛藤を抱えています。ではここで、学園に入学してくる子ども達の心の内側を覗いて見ることにします。こうした子ども達の心を知ることは支援の大前提だからです。

「学校に行けなかった自分に対する罪悪感や自責感でいっぱい」

登校したくてもできなかった自分に対する罪悪感で葛藤し、自分を責め続け、緊張と不安に襲われています。

「学校に行けなくなった自分は駄目な自分だ」

みんなが学校にいているのに、自分は学校に行けなくなった。学校にも行けない自分は駄目な人間ではないかと密かに思っています。

「先が見えない不安でどうしていいか分からない」

学校に行くことが当たり前なのに、その学校に行けなくなった自分はこの先どうしたらいいか不安で先が見えない気持ちで悩んでいます。

「周囲の目がとても気になり、過敏になっている」

ささいな周りの人の言動に敏感に反応し、対人不安を抱えて、常に自己防衛的になっています。

不安と心配で心身が疲労した子ども達は、健全な生活をしている親や先生やクラスメートなどからは、なかなか理解することが難しいのです。こうした子ども達に学園としてはどのように支援を始めていくのか、学園はこれまでの長い不登校支援の経験の中から次のことが大切だと考えています。

1 何よりも不登校の子どもの心に寄り添うこと

言葉にできない不安、理由の分からない憂鬱というか、気分の晴れない心を抱えて悶々としている子どもにしっかりと寄り添うことです。この状態の子どもに、不登校の理由などを尋ねても、何も返っては来ません。

2 まちがっても教育的な配慮などといって、こうしなさい、あしなさいと次々正論をぶつけてもそれは支援にはなりません

“頑張りなさい” “やればできるでしょう” “しっかりしなさい”

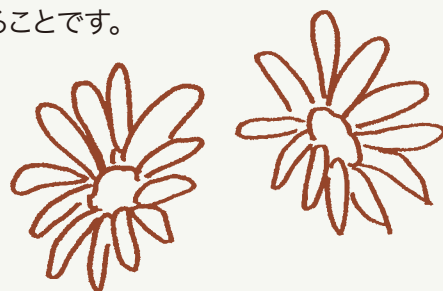
こうした正論は、この子ども達には、酷な言葉で、かえって子どもの心を、逆撫ですることになり、支援の逆効果になります。

3 不安をかきたてないように、また不安を刺激しないようにおおらかに対応していくことです

一見、親や先生から見て異常なように見えても、子どもは、自分と他人、現実と非現実、家と外の区別はちゃんと心得ているのです。病気ではないのです。

4 たっぷりと心を解放し、疲れた心を癒す時間を与えてやることです

音楽を聞いたり、漫画を読んだり、趣味に熱中したりして、不安な心を癒し、遊ばせて心身の元気を取り戻してやることです。



1 これまでの家庭生活の実態を把握する

- ① 不登校中の家庭での生活リズムはどうだったか(昼夜逆転など)
- ② 家族への暴言や暴力はあったか、なかったか
- ③ 家族とのコミュニケーションはどの程度あったか
- ④ 親子関係はどうだったか、父親や母親との関係はどうか
- ⑤ 自室にこもりがちか、外出はどの程度できたか
- ⑥ 外部の友達や仲間などとの交流はどの程度あったか

2 これまでの学校生活を把握する

- ① 小・中・高等学校での登校状態はどうだったか
- ② いじめやその他学校でトラブルはなかったか
- ③ 先生との関係はどうだったか
- ④ 学業成績などはどうだったか
- ⑤ 部活動や友達関係はどうだったか

3 医療との関係などについて

- ① 不登校で医者や病院にかかったことがあったか、なかったか
- ② なんらかの診断結果があったかどうか
- ③ 服薬などしているかどうか
- ④ 相談機関とのかかわりはどうだったか

以上のような観点から不登校の実態の全体像を把握して学園の支援に役立てるのです。

一人ひとりの子どものアセスメントをもとに 支援の方針を立てます

- 1 不登校状態が長く、心身の状態が重たく、対人関係を作ることが出来ない不登校の子どもの場合は、徹底した受容と共感で心の安定を最優先に、1対1の心理的支援に重きを置いて、寄り添いつつ安心できる環境を提供することに心がけます。
- 2 対人関係が苦手であっても、比較的動くこともでき、コミュニケーションもとれる子どもの場合は、徐々に活動的プログラムへの導入を試み、動くことの喜びを実感するよう支援を進めます。
- 3 不登校の子どもは、一般的に集団的活動に抵抗感をもっていますが、活動の仕方を工夫すれば、初めから無理に集団に入れなくても、集団の周辺で、個別の活動に自由に取り組ませ、様子を見ながら、集団活動にアプローチできるように配慮すれば、集団への適応が進みます。
- 4 対人関係が比較的活発にできる子どもの場合は、集団の活動プログラムに積極的に導入し、活動することの快感を実感させ、仲間と関わる喜びを味わうように支援を進めます。
- 5 発達に困難をかかえている(LD・ADHD・広汎性発達障碍)子どもについては、何よりもどのような障害なのかについて、確かな情報を持ち、その情報をスタッフが共有し、それぞれの課題に合った支援を行います。



長い不登校経験によって、ようやく学園に入学してきた子どもが学園生活に慣れていくには、生活の一コマコマを自分でマスターしていかなければなりません。そのために担当のスタッフは、丁寧に子どもが学園生活に適応できるように支援していきます。こうして自立的な生活ができることは学園に適応していく基本だからです。

- 1 昼夜逆転の生活から昼型の生活に戻すために、スタッフは、朝の起床時間に起床するよう継続的に支援を続けていきます。
- 2 就寝の時間についても、夜型が定着していた過去の生活を清算して、翌朝の目覚めのために、就寝時間に就寝を促す支援を継続するのです。自由におけばいつまでも寝ない生活をなんとか、自力で乗り越えさせる支援を行うのです。
- 3 消灯することで、睡眠は促されるので、消灯の支援も重要です。
- 4 睡眠と食事は、学園が生活支援の中でももっとも大切にしているものです。「よく寝て」「よく食べる」。この基本があって、昼の活動が生き生きとしてくるのです。もちろんの食事のマナーやルールについても支援することは当然のことです。
- 5 寮生活における自立の支援については、健康の自己管理、洗濯や清掃の支援も重要な支援の中身になっています。



かつてある学園生の父親が、親の会で話したことが、生活支援の意味を象徴的にあらわしています。父親曰く「息子が学園に入学して何より驚いたことは、自宅に帰って、生活が早寝、早起きになり、洗濯も自分でするようになったことです」と笑顔で話してくれました。

家庭という生活の場から離れ、親からも離れ、未知の人との生活が始まる子ども達は、心はおだやかではありません。まして不登校で長期にわたって人との関わりの少ない生活が長かったので、極度の不安と緊張の心身状態で学園生活が始まります。したがって心理のスタッフが中心になってこの不安と緊張を和らげなければなりません。学園での心理スタッフの仕事の中心はカウンセリングです。

学園でのカウンセリングには大きく二つのアプローチがあります。

1 カウンセリングルームでの1対1のカウンセリング

緊張と不安を和らげるには、カウンセラーと子どもが安心して向かい合える1対1のカウンセリングが不可欠です。特に学園のカウンセラーは、不登校の子どもに対しては、徹底した受容と共感の心をもって、子どもの心を和らげていくのです。こうしたカウンセリングは、あらかじめ子どもと約束して、定期的に進めていくものです。



2 日常的カウンセリング

上記のカウンセリングが、計画的、定期的であるのに対して、ここでいうカウンセリングは、日常的なカウンセリングであって、いつでも、どこでも構えることのない交流的な意味をもつカウンセリングです。何気ない昼休みとか、イベント中とか、庭の片隅とか、散歩中とかの場面で、何気なく心に寄り添い、ケアにつなげていくのです。

こうしたカウンセリングも心の安定を進め、信頼関係を深める大切な意味を持っているカウンセリングなのです。

こうして子ども達は心の安定と学園生活への適応を高めていくのです。

学園での集団適応をスムーズに進めることと、自己理解を深めたり、対人関係能力を高めたりすることが不可欠です。そのため学園では、主に心理のスタッフによってこうした二つの心の教育をプログラムに組み入れています。

1 心理テストによる自己理解

ストレスを低減するための一つの方法として、ストレスマネジメントのワークがあります。また対人コミュニケーションを高めたり、ストレス対処にもなるアサーショントレーニングも学園では行っています。

こうした心の学習と同時並行して、子ども同士の話し合いで、「大人になるとは」とか「幸せとは」などのテーマで、話し合ったり、生きていくことの意味を考えたりするプログラムもあります。また修了後の自分の生き方を考えたりするプログラムもあります。

2 ソーシャルスキルを高める学習プログラム

他者との人間関係をどのようにうまくつくっていくか。これは不登校の子ども達の場合、特に求められる能力です。そのため学園では、「相手に対する意志の伝え方」「他者への断り方」「自己紹介の仕方」などをグループにおけるコミュニケーションワークとして、ソーシャルスキルを高める学習として行います。

このように総合的に対人関係能力を育成し、学園生活をよりスムーズに、より親和的に送れるように心の支援を進め、自己成長につなげていくのです。



子どもの成長発達の中核的支援としての教育的支援プログラム

子ども達の発達の現状を把握した上で、子ども達に対する成長促進的に意味を持った楽しく有意義なプログラムを提供するのが、この教育的支援プログラムです。このプログラムは、学校で言えば学習時間割のように日々配置されています。学園におけるこのプログラムは、さまざまなプログラムがあり、実に多岐に及んでいます。以下は現在子ども達が行っている1週間の教育的支援プログラムです。

1週間のプログラム例

曜	開始時間	実施プログラム						
月	午前	①	個別相談					
		②	グランドスポーツ	お菓子	書道	デジタルアート・PC	読書	
		③						
	12:10	昼食						
	午後	④	農園	動物飼育	野外創造	食育	進路・学習	
		⑤						
		⑥						
17:45	夕食							
夜	カラオケ	パソコン			進路・学習			
火	午前	①	グループワーク	ミュージック/ビギナーミュージック	乗馬	華道	クラフト	進路・学習
		②	学園生集会(特別研修室)					
		③						
	12:10	昼食						
	午後	④	ふれあい体験	ガーデニング	チャレンジ未来体験	料理	芸術鑑賞	C.P.(F&Mゾア邸 2F)
		⑤						
		⑥						
17:45	夕食							
夜	カラオケ	パソコン			進路・学習			
水	午前	①	ポップミュージック	美術・陶芸	こどもと文化	エンジョイスports	インターネット	
		②						
		③						
	12:10	昼食						
	午後	④	農園	動物飼育	野外創造	進路・学習		
		⑤						
		⑥						
17:45	夕食							
夜	カラオケ	パソコン	進路・学習	茶道(第1・3週)				
木	午前	①	個別相談		ニューミュージック	進路・学習	手芸・アクセサリー	チャレンジスポーツ
		②						
		③	寮清掃					
	12:10	昼食						
	13:00		週末の集い(特別研修室)					



前ページの1週間のプログラムからも分かりますように、学園の教育的支援プログラムは多岐にわたっています。プログラムに共通する理念は、「体を動かし・頭を働かせ・心に感じる」(臼井吉見)であります。以下は本学園が20年かけて開発した体験的教育支援プログラムの多様な姿です。

1 農園プログラム

約10アールの畑では、季節の野菜をはじめ、イチゴやスイカやトマト、さつまいも、じゃがいも、大根などが栽培され、これらの新鮮な野菜、果物の収穫は、そのまま学園の食堂で調理され、食べるのです。こうした農業体験について、学園のあるスタッフは次のように、その意味を記述しています。

「子ども達は、野菜の栽培を通して、人としての生き方を学んでいる。大地を耕す一振り一振りが自身の心を耕すことにつながり、汗を流し種を蒔き、水をやり、肥えをやって育てることは、同時に自分の心を育てることにそのまま通じているようです」

2 野外創造プログラム

学園生活がより快適に送れるように、キャンパス内にベンチを設けたり、癒しの空間を創ったり、花や樹木を植えたり、心休まるビオトープを整備したり、池を造ったりして、体を使い汗を流して自分達の生活空間を快適にする活動がこのプログラムです。

3 花壇づくりやガーデニングプログラム

神出学園が花の学園と呼ばれるほど、キャンパス各所に季節の花が咲いています。フラワーポットの花植えなども、スタッフと共にするガーデニングプログラムによるものです。

こうした自然の環境整備によって自分達が生活する空間が、癒しに満ちた空間としてよみがえり、それに自分達もまた癒されるのです。

4 季節毎の特別自然体験プログラム

自然体験の中で、もっとも大きな学園の体験活動は、日常の体験ではありませんが、夏の「海の体験」と「山の体験」、そして冬の「スキー体験」です。その年によって行き先を検討して決めています。

福祉体験プログラムは、学園の大切なプログラムの一つになっています。学園では創立初期からこのプログラムを展開してきました。不登校体験を抱えてきた子ども達は自分への自己肯定感を持たず不安に悩んでいます。そうした子ども達が、幼い幼児と出会い、また障害を抱えている人達とかかわり、そしてまた高齢の方々とお会いすることによって、自分でも何か役立つことができるという自己発見が期待できます。こうした新たな自分を見つめ直す機会となることがこのプログラムの目的になっています。

1 保育園児とのふれあい

学園では、神出町の保育園児とのふれあいを長く続けてきました。学園の子ども達は、1歳児から5歳児までの幼児達とのふれあいを迷いましたが、共に遊びを共有することによって、楽しい交流が始まり演じる紙芝居に園児達が小さな手をぱちぱちとたたいて応答してくれる姿に、自分の有用感を感じ自信につながったようです。

2 養護老人ホームでの自己充実感

「三木市立さつき園」は、家族から離れて暮らす老人達の生活の場です。ここにお邪魔し、お年寄りとのふれあうことで、学園の子ども達は、高齢者の方々がかような思いで暮らしているのかつぶさに観察し自分たちに何が出来るかを考え、かかわり方を考えました。結論は「楽しく遊んで笑顔をたくさん作り出す」ということになり、遊びを中心にふれあいを始めました。「風船バレー」「ゲートボール」など、学園の子ども達は、老人達が子どものように元気に遊ぶ姿に「僕達が来てから、老人の人がすごい元気になった」「私達、いいことしてるよね」と充実感を感じたようです。



3 知的障害者との交流

近くの知的障害者施設「あゆみの里」も学園の福祉プログラムの大切な施設です。学園夏祭には学園にお招きして、共に西瓜割りや花火を楽しみました。紙芝居を演じたり、おもちゃ作りの交流もしました。子ども達は、こうした人のふれあい体験を通して「生きる」ということの意味を考える貴重な体験になったようです。

この他にも学園の子ども達は、日常なかなかふれあう事が出来ない方々とのふれあいによって、新たな人生観や生きる力をそれなりに獲得したように思います。

文化創造体験活動は、子ども達の創造的エネルギーが、さまざまな創造活動となって、見事に学園生活を豊かなものになっています。

音 楽表現活動

不登校の子ども達にとって、音楽は大きな心の癒しになっています。学園のプログラムの中でも、音楽活動のプログラムは魅力的なプログラムの一つです。ジャンルは多様で、しかも活動の中身もさまざまです。楽器演奏、歌唱はもちろんのこと、いくつものバンドによる季節毎のイベントでのライブ活動は、仲間づくりにとっても大切な活動になっています。演奏活動に参加したことで、自信と自己肯定感も高まり、大きな成長のキッカケになっています。

陶 芸創作活動

自分の思いを形にするという表現活動の中で、陶芸活動は魅力に満ちています。基礎の技術の習得の上で、イメージを形にする。そして窯だしの瞬間の驚きと感動。この活動は心の安定にも大いに役立っています。

書 道・お茶・お花のプログラム

書の素晴らしさは、集中して精神の統一によって厳かに行われる行為なので、日頃の雑念から解放されて集中できます。結果として書の上達につながる。これが書の魅力です。

お茶もお花もまた日本古来の文化で、その厳格な作法や様式は、しばし我を忘れて、独特の美や幽玄の世界にひたることが出来ます。それは子どもの日常では得られない新たな美の発見になっています。

デ ジタルアートやコンピューターグラフィック

こうした創造活動は極めて現代的な美の創造であり、これまで学園の各所に、このプログラムで制作した作品が展示され、そのことによって子ども達は自己肯定感を高めています。

学園の文化創造のプログラムは、学園生活に潤いをもたらすこともさることながら、子どもの友達づくりや心の安定と成長につながっているのです。

学園のプログラムからも分かるように、プログラムの各所に「進路・学習支援」のプログラムが配置されています。本学園の子ども達の多くは小・中学校および高校で不登校となった子ども達でありますので、学力については、十分な力をつけることができなかつたのです。そこで学園としては、子ども達のこれからの生き方を見通して、学力を回復させてやることが重要と考え、この学習プログラムを展開しています。

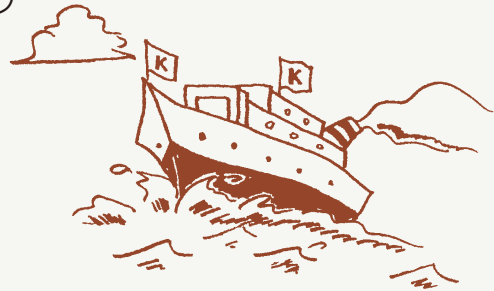
このプログラムにおいては、学習支援の内容として以下のような内容で支援に当たっています。

1 個の学習ニーズに対応した支援

一人ひとりの学力は様々で、一斉に学習を進めることはできません。したがって、一人ひとりの教科の違い、進度の違い、関心の違いに合わせて個別方式で学習援助の指導をすすめなければなりません。学園スタッフはこうした個別の学習ニーズに対応して支援をするのです。

2 特定の進路に進むための学習援助

例えば「高等学校卒業程度認定試験(高認)」などのように、限られた資格に挑戦する場合は、そうした試験や資格取得のための、独特な学習の仕方があるので、そうした資格に挑戦するノウハウを含めて学習支援を進めるのです。最近この高認試験に挑戦する子どもが増えてきています。



3 様々な資格取得のための学習援助

英検とか漢字検定というような特定の資格への挑戦などについても取得のための指導や情報提供やノウハウを出し、支援に役立てています。

こうした学習にほとんど関心を示さない子どもに対しては、強制することはせず、別の活動に集中するよう支援をしています。

このプログラムは入学後、半年程経過して導入されるプログラムです。

学園生の進路への意識付けを目標に設けているプログラムです。入学段階ではほとんどの子どもは進路や生き方などは遙か彼方の問題で関心は薄いのですが、半年程が経過すると、身近な先輩達の旅立ちも見て考え始めます。この時期に合わせてこうしたプログラムの導入を試みます。

このプログラムは、主に県内の各種事業所や専門学校、大学や公共機関などに出かけて、見学し、説明を受けたり、模擬授業を体験したり、さまざまな体験をして、これからの自分の進路発見に役立てるプログラムです。

以下は昨年訪れた訪問先の一例です。

神戸芸術工科大学	サントリープロダクツ	竹中大工道具館
関西国際大学	神鋼神戸発電所	県立考古博物館
神戸税関	日本銀行	神戸電子専門学校
自動車学院	くららベーカリー	兵庫県警察
須磨海浜水族園	雪印メグミルク	兵庫県庁

こうした探索活動が即進路につながるものではありませんが、やがて自分の進路に向かう時、仕事の大変さや責任などについて現場の話を思い出し、働くことの意味、その辛さ、喜びなどを学び、生きることの意味と自分の進路を模索するのに役に立てるのです。これまでの何人かの例を挙げれば、アニメ好きの子どもが、アニメ専門の大学に入学したり、心理の勉強に関心を持ち、心のケアの専門機関に就職して心理士として活躍したり、また大学で音楽セラピーの研究に取り組んでいる修了生もいます。



5. 6ヘクタールの広さを持つ神出学園のキャンパスは、スポーツをはじめさまざまな野外活動に適しています。中でも学園が誇りとしている乗馬プログラムは、もっとも人気のある、魅力に満ちた野外体験プログラムです。

馬が元気と自信を与えてくれる

乗馬体験は、不登校の子ども達の支援として、その意義が学術的にも報告されてきています。不登校の子ども達は学校にいけなくなったということで、自分を責め、自信をなくしています。そうした子ども達が、馬との日々の世話を通して、馬との信頼感を深め、馬との呼吸が深まり、その上で乗馬することによって元気をもらっています。「あの大きな馬が僕たちの言うことを聞いてくれた」「馬とぼく達の心が通じ、こちらが発するサインで動いてくれる」こうした体験は、子どもと馬との信頼感から生まれた一種の快感です。自分もやればできるという、この実感は自信につながるのです。したがって乗馬はまちがいなく学園生の心の支援にもつながっているのです。もちろん馬に乗るだけではなく、エサをやる、毛並のブラッシングする。フンの始末もワンセットの体験として意味があるのです。



馬の他に、学園には動物が沢山飼育されています。それは動物達の癒し効果に注目してアニマルセラピーが日常的になされることを期待して、動物飼育が行われているのです。

羊のもつ癒し効果

羊は学園開設段階から導入されました。その意味は、羊のもつ人に与える暖かさ、さらには景観上の癒し効果、また羊毛による糸づくり体験など、羊のもつ役割は子ども達の心身を癒し、豊かにしてくれています。

兎のもつ癒し効果

兎も早くから学園に導入されました。兎の持つ「かわいさ」もまた、子ども達の心の支援にかかわっています。ある女子学園生は入学後、かなり精神的に不安定になっていましたが、この女子の居場所は朝から兎小屋でした。「私は学園の生活はしんどいけれど兎を抱っこしていると心が落ち着くのです」といって、兎から元気をもらい、その後兎好きの仲間ができ、徐々に学園生活に適応していきました。



犬のもつ癒し効果

犬は学園生のアイドル的存在です。朝の散歩、お出かけ体験のお供に、そして子ども達の活動の道づれに、その存在はとても大きいのです。先日10年程前に修了した男子学園生が、学園にきて、いみじくも話した言葉があります。「ぼくが入学したのはこの犬がいたからです、学園の体験宿泊に参加したのですが、泊まるのがしんどく、途中で帰ろうかと思いました。そんな時学園の「つばき」(犬の名)が、僕の後を追いかけてくるのです、3日目も僕の後についてくるのです、僕はこの犬が可愛くて、この犬がいたから学園に入学し、修了することができました」

学園生にとって動物たちはまさに、心の支援に深く貢献しているのです。

食事は生きる喜びの一つとして、とても大切なもので、学園はこれまで食に力をいれた運営をしてきました。このことは開設段階にさかのぼってみるとよく分かります。①業者委託をせず、自前食堂で季節に応じ、子どものニーズを受け止める食事を提供する ②子ども達の中には心身に課題を持つ者が少なくないのです。(拒食・過食)こうした子に配慮する ③食育を通して子どもを支援する ④食を通して栄養士や調理士が子どもとのかかわりを深める。こうして学園は当初から、子どもに食の支援を重視してきました。

1 学園での食育プログラム

学園の農園で収穫した野菜などの食材を使って、春はイチゴジャム、夏は梅干しと梅シロップ、山桃シロップ、秋は干し柿、冬はたくあん漬けや白菜漬けなどを子ども達は協力してつくります。このことが食への関心を深めています。同時に食を通じた仲間づくりも意識してプログラムを展開しています。

こうして本物の食材を知り、作り手の顔が見え、本物の味にふれるこの食の体験は、学園への適応を促進するのにも役立っています。



2 料理・お菓子づくりプログラム

このプログラムは何よりも子どもの「やりたい気持ち」を大切に、和・洋・中などのさまざまなジャンルの料理やお菓子づくりに取り組んでいます。グラタン、餃子、ピザなどにも挑戦し、これによって食のレパートリーはぐんと広がっていくのです。同時に基礎調理技術の習得にもつながっているのです。

食育プログラムは作る喜びと共に、仲間と共においしく食べることを目的とした楽しいプログラムといってよいと思われます。特に季節を意識して、その時期に合った料理やお菓子は、学園の内外から評判になっています。



学園における不登校支援のプログラムの中で、特別意味のあるプログラムとして考えられているものに「祭り」や「イベント」があります。こうしたプログラムの持つ意味は、学園生活に変化をもたらし、子ども達を元気にする有意義なプログラムです。

年間に行われる祭りは大きいものでは、夏に開かれる「夏祭り」、それから秋に開かれる「学園祭」、冬のクリスマス会、新春フェスティバルなどがあります。こうした大きな祭りの間に、各種のイベントやパフォーマンスもしばしば行われて活気をもたらします。とりわけ、音楽ライブは四季折々開かれています。以下はこうした祭りやイベントの持つ意味と成長促進的な役割は以下の通りです。

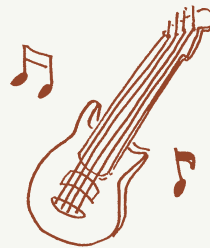
1 自己肯定感を高める

祭りもイベントも、それぞれの子どもがさまざまな役割と責任を担って可能になるのです。不登校の子ども達はこれまで、常に影の存在で、ひっそりと生活してきました。そうした子ども達が自分に与えられた責任を遂行しなければなりません。彼らは必死で自分の責任を全うしようと努力をし、そのことが評価される時、大いなる自信を感じるのです。

こうしてやり遂げた自信は、これまで以上に確かな自己肯定感になるのです。こうして子ども達は祭りやイベントをする毎に、自己肯定感が高まるのです。修了を迎えたある控えめな子どもは、「ここにきて、はじめて人の前で司会ができた」と自信の程を語ってくれました。

2 集団の中での役割意識が身につく

祭りは、人や仲間と協調しなければ、成功できません。ある子どもは音楽ライブをやりきった後、「自分のパートをやりきった後、自分でも役割をやり遂げたことで、すごい自信になった」と興奮して話しています。



3 対人関係能力が高まる

長い不登校の末、学園に入学して、大勢の仲間と生活が始まります。「しんどいけれど、みんなと楽しいイベントをすれば、それだけ仲間と楽しく語れるようになる。それが友達づくりにもなる」これはある子どもの言葉です。

4 仲間づくりが促進する

「祭りやイベントの数だけ、仲間づくりが進む」この言葉は本学園の一スタッフの言葉です。

子ども達への教育や支援というものは、それぞれの機関やスタッフだけでできるものではありません。大切なことは、子ども達の保護者を支えることと、保護者と協力して支援に当たることです。学園では平成22年から心理スタッフによる保護者支援のためのプログラム「ペアレント・トレーニング」を始めました。

このプログラムの目的は、保護者が子どもとのコミュニケーションの取り方について実践的に学ぶことによって、保護者の子どもへのかかわりに少し変化が生まれ、親子のコミュニケーションや、関係の在り方に、よい影響が生まれることを期待して始められたものです。

実施時期

保護者から参加者を募り、グループワークのようなスタイルで、金曜日の午後に行っています。

実施内容

学園で作成した『輝く未来のために—思春期・青年期の子どもとの付き合い方—』をテキストに、それぞれの回で、テーマを決めて行います。平成24年に行ったテーマは①「子どもの適切な行動に注目しましょう」②「子どもの話を上手に聞く」③「保護者の意見をどのように伝えるか」④「子どもに任せること、話し合うこと」などです。

どんな成果が得られたか—保護者の感想

- 家で子どもに命令口調で話していたことが反省された
- 褒めることをあまりしてこなかったが、褒めることが大切だと分かった
- 思春期のことがよく分かるようになった



これまで学園に入学した子ども達はいろいろな機会にさまざまな声を残してくれています。学園で毎年発行している『こころ豊かに』—神出学園のあゆみ—から、その声を拾ってみることにします。

入学の不安と期待

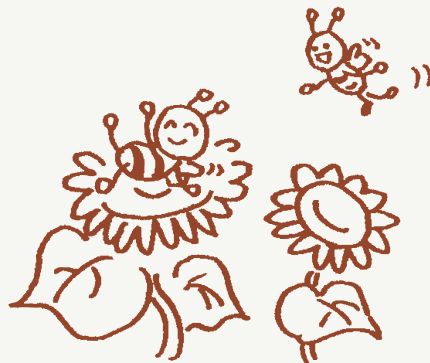
- 「ようやく神出学園に入学することができたのですが、メチャメチャ緊張して、どうしよう!と思っていると、"先輩がお風呂に入ろう"と声をかけてくれて、急に緊張が解けた」(21期)
- 「ここでやっていけるかな!と夜になると考えてしまう、家に帰りたいとやたら思ってしまった、でも家に帰ったらもう自分は終わりだ、学校とは違ってスタッフがすごい親切だ、ここならやれそうだ」(7期)
- 「ここはなんでもやれそうなところだ、自分の人生はここからスタートだ、友達もできそうだ、ここでゆっくりこれからの人生を考えよう」(13期)

学園が楽しくなった

- 「学校の勉強は嫌いだけれど、学園のプログラムは苦にならない、楽しい。乗馬なんて最高、2年間だけだけれど、3年も4年もいたい気分、そろそろ自分のこれからを考えよう、いつまでも居れないんだから」(33期)
- 「はじめて友達ができ、一生友達はできないと思って諦めていた。毎日がいっぱい楽しいことがあって、学園に入学してよかった」(21期)

ぼんやりしてられない

- 「真剣に進路を考えるようになった、もう入学して半年経った。やっぱり大学に行きたい、でも高卒資格がない、高認に挑戦するしかない、本格的に勉強するしかない」(31期)



創立以来学園の修了生は、500人を越えています。この子ども達は、さまざまな言葉を残して学園を巣立っていきました。その言葉の奥にはスタッフの涙を誘うような言葉がちりばめられていて、私たちを感動させてくれます。以下そのほんの一部をここに掲載しておきます。

《 友達ができた喜び 》

- 「同じ悩みを持つ仲間と学園で出会い、お互いの心を分かり合う友ができたことはとても大きなことでした」(28期)
- 「寮の中でこれまでの自分を語る友ができ、そのことによってめちゃくちゃ楽しく元気になり、暗い過去から明るい未来に変わった」(25期)

《 自分の成長を実感した喜び 》

- 「学園で自分を見直し、自分探しができた、これは凄いこと!」(24期)
- 「人前で話せず自信のない自分が、イベントの司会をし、バンドができ、自分もこんな大きなことができるんだ!」(25期)

《 自分が好きになれた 》

- 「学園で2年間、自分はみるみる私らしさを取り戻した」(18期)
- 「人は変わる、学園で僕は変わった」(20期)
- 「人が好きになりました、話すことが好きになりました。驚くことに、自分をも好きになりました」(21期)
- 「あれほど自分に否定的な私が、自分を認めるようになった」(16期)

《 進路が見えてきた喜び 》

- 「学園の体験活動で保育園に行った、進路は保育士と決めた」(24期)
- 「学園の進路プログラムで高認に挑戦、合格!」(28期)



神出学園は保護者との関係を大切にしてきました。子ども支援はなんといっても保護者との連携が不可欠だからです。これまで沢山の保護者の方が、学園の文集に原稿を寄せてくれました。この原稿に目を通すだけでも私達スタッフは胸が熱くなります。ここに何人かの原稿の一部を再現しておきたいと思いません。

《 28期生のある保護者 》

「神出学園に子どもが入学した日、学園長が『皆さんはいままで大変辛い思いをしてこられたと思います』とお話しされたとたんから、私は、もう最後まで涙が止まりませんでした、今思うと本当に子どもの不登校で辛かった3年間、ずっと胸に仕舞い込んでいた感情がこの時溢れて、もう止まりませんでした。学園に入学して、子どもがしたかったバンド活動に取り組み、それから元気を取り戻したわが子は、高卒資格取得のための通信制高校に入り高卒資格に挑戦し、バンドで司会も務め、みるみる元気になり、親の心配をよそに、どんどん伸びていきました。ある日子どもが言いました『今の自分があるのは、神出の友、スタッフ全部合わせて自分がある、ただ感謝や!』学園があってこの子の成長がある」

《 31期生のある保護者 》

「学園に子どもが入学したその時、学園で感じる風の柔らかさに驚きました。優しく、心地よく、先を見失いそうな私たちに、そっと手を差し伸べて下さるスタッフ達との出会い、自然環境の素晴らしさに感動しながらじっと見ていると、学園の自然は私たちに語り掛けてくれているようで癒され、ここで子どもを過ごさせてやりたいと心から思いました。それから子どもは驚くほど笑顔になりました。ここでの子どもの生活はとても貴重なものになりました。学園祭の子どもの姿を見て胸が一杯になりました。子どもにとって、神出学園で過ごした時間は、人として生きていく上で、かけがえのない大切なものになりました。」

《 16期生のある保護者 》

「いよいよ子どもの旅立ちの日になりました。子どもは学園で学んだことを自信にして、自立していくものと思います。学園を創設して下さった兵庫県、そして思いやりをもって接して下さったスタッフの方々、本当にありがとうございました。これから子どもは学園にいたことを誇りに思って羽ばたいていくと信じています」。

学園の子ども達の思いから生まれた歌 「神出の僕ら」

平成18年学園の女子学園生が心を込めて綴った詩に曲がつき、素晴らしい歌になりました。曲名は「神出の僕ら」です。いまやこの歌は、学園歌のごとく、イベントには必ず子ども達が心をこめて歌う歌になりました。この歌には学園に入学した子ども達に共通する思いが歌いこまれているので、子どもも親も涙ぐみつつ歌うのです。

「神出の僕ら」

秋空高く
僕は黙って
鳴いてばかりで
鳥を見ていた

ほら誰かが
でも みんなで
気持ちの網が
キラキラのネットで

今 僕に
ここで過ごした
「ありがとう」僕が
君の笑顔と言葉に

鳥の声ひびく
鳥を見ていた
飛ぼうとしない
僕も泣いてた

落ち込んでいる
励まし合おう
光にかわり
君を守る

あふれる勇氣は
時間の中
飛び立つ時は
守られていた

(歌詞一部省略)

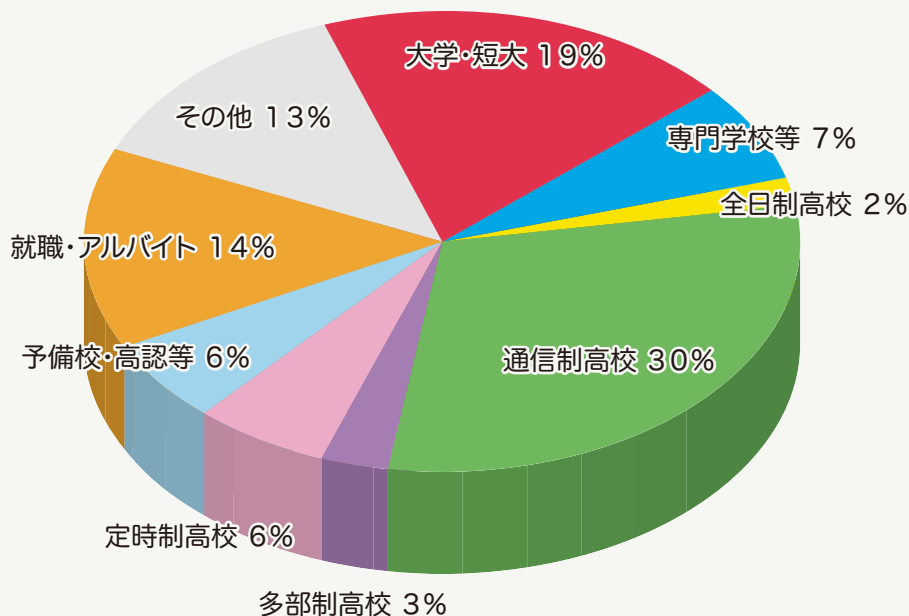
この歌は一人の女子学園生の詩に音楽講師の関谷咲子さんが作曲し、見事な歌に仕上がりました。平成23年この歌の素晴らしさをCDに残そうと、音楽活動の専門家である、大森和良・荻野祐樹両先生の協力でCDになりました。この歌にかかわって、34期生の保護者が「わが子が学園に入学してから確実に子どもは変わっていきました。学園の2階に木彫りの「神出の僕ら」があります、「泣いてばかりで飛ぼうとしない鳥、僕も泣いていた」この歌詞を見ながら涙が出てたまりませんでした。でもこの詩のように「君は必ず飛べる」と歌うように、わが子は自信を持ち始めました。学園祭に高石ともや氏が、この歌を歌っているとき、ただ涙が止まりませんでした。周りの客席からも涙ぐむ姿が見られました。親子がこの歌に支えられたのです」



創立以来学園を羽ばたいた子ども達は500名を越えました。大部分は不登校のまま中学校を卒業し、高校には行けなかった子ども達ですが、高校にかるうじて進学したものの、不登校となった子ども達もいます。いずれにしても、大部分の子ども達は高卒資格がないのです。したがって学園に入学後多くの子ども達は、当面高卒資格をなんとか取りたいと思い、さまざまな挑戦を始めるのです。

以下のデータは学園創立以来本年3月末現在の学園修了生の進路を集計したものです。これによると、高卒資格に挑戦したものの内、通信制高校に進学したものの30%、定時制高校6%、多部制高校3%、全日制高校2%となっていて、高卒資格に挑戦している子ども達は合わせて47%となっています。次に多いのが大学・短大・専門学校などへの進学の子で、26%を占めています。学園に入学した段階では、高卒資格や大学などは、夢また夢の状態でしたが、学園で心身の支援を受けて、2年後には自分なりの進路を見つけいくのです。もちろんデータが示す通り、進学などに興味を持たず、就職やアルバイトなどに飛び立つ子どもも14%います。旅立ちはさまざまですが、入学段階のあの萎れきった心身の状態を思う時、こうした旅立ちは感動的でさえあります。

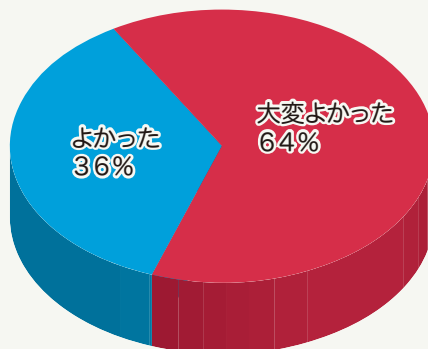
「学園修了後の子ども達」



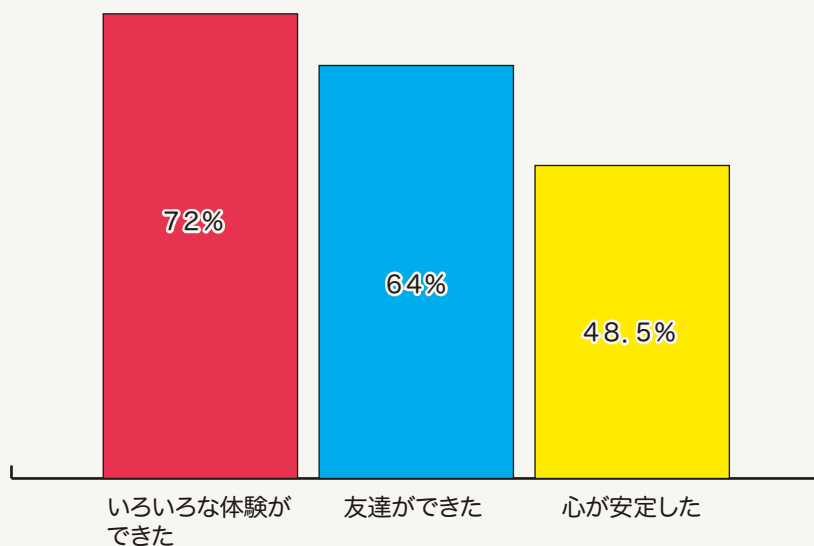
(平成25年3月31日現在)

子ども達は学園に入学したことによって自分づくりにどのような変化があったのでしょうか。学園では昨年・5年前・10前と3回調査を行ってまいりました。ここではこれら3回の調査を合体し集計したところ以下のような結果が得られました。この結果は学園スタッフにとって実に貴重な嬉しい評価になりました。以下はその一部のデータです。

「神出学園に入学してよかったか」(グラフ1)



「よかった理由(複数選択)」(グラフ2)

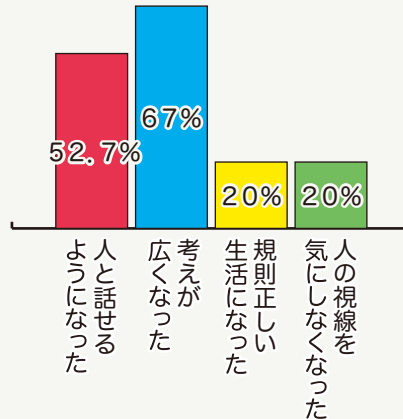
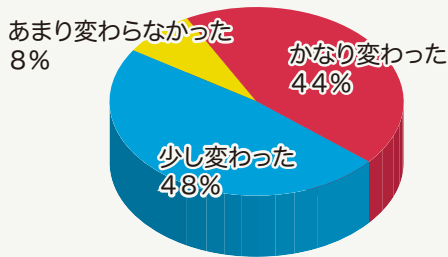


グラフ1の「神出学園に入学してよかったか」については、「大変良かった」が64%、「よかった」が36%、「どちらともいえない」が0%となっています。このデータはほぼ100%の子どもが学園入学を肯定的に捉えていて、学園としては嬉しい評価となりました。

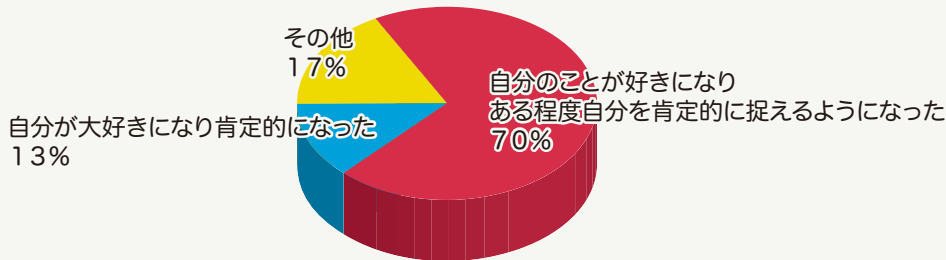
グラフ2は「入学してよかった理由」を聞いたものです。これによると、「いろいろな体験ができた」(72%)「友達ができた」(64%)「心が安定した」(48.5%)が上位で、いずれも学園生への支援が有効に作用していることがわかります。

学園生活によって子ども達の自己肯定感はどう変わったのでしょうか、この問いに関する質問をしたところ、以下グラフ3とグラフ4の結果が得られました。

「学園生活で自分が変わったと思うか」 「かなり変わった」「少し変わった」理由 (グラフ3) (グラフ4)



「かなり変わった」「少し変わった」人の自己肯定感 (グラフ5)



グラフ3の「学園生活で自分が変わったと思うか」については「かなり変わった」(44%)「少し変わった」(48%)「あまり変わらなかった」(8%)となっていて、学園生活が自分づくりに大きな役割を果たしていることがわかります。

グラフ4は「かなり変わった」「少し変わった」と答えた人に、その理由をいくつでも答えた結果です。1位は「人と話せるようになった」(52.7%)「考えが広がった」(67%)「規則正しい生活になった」(20%)「人の視線を気にしなくなった」(20%)などの自己変化を実感した回答が多く得られました。

もう一つ、子ども達が入学したことによって自己肯定感がどのように変化したかを聞いたところ、グラフ5の結果が得られました。それによると「自分が大好きになり肯定的になった」(13%)「自分が好きになりある程度自分を肯定的に捉えるようになった」(70%)という結果になり、学園生活で子ども達は自己肯定的になったことがわかります。

このように見てきますと、不登校で自信もなく悩んでいた子ども達が神出学園で大きな自己変化を遂げていたことがわかり、学園としてもこれによって支援に自信を持つことができました。

県内外の多くの方々注目の中で創設した神出学園は、これまで不登校支援に関する実践研究や膨大な事例研究を積み上げてきました。これらの研究から導き出される、支援の方法は多岐にわたっています。そうした多くの累積された知見は貴重であるだけに、県内外に発信していくことが、学園には求められていました。また学園外の各層からも学園の支援に関するノウハウを求められることもありました。こうした要望に応えて、学園は、冊子による二つの研究を明らかにしました。以下はその概要です。

1

『輝く未来のために—思春期・青年期の子どもとのつきあい方—』

この冊子は平成23年3月に発行されたものです。学園の子ども達は全て思春期段階の子どもたちです。思春期は人生の中でも、もっとも激動の時期です。心身が子どもから大人に変わるこの時期は保護者にとっても、教師にとっても扱いの難しい時期です。この時期の不登校をどう乗り切っていくか、そのためには保護者が子どもとのかかわりが大切になります。この点に注目して、主に心理のスタッフによって書かれた、保護者支援のテキストです。この冊子は保護者や支援者にも好評で、学園の蓄積されたノウハウが分かりやすく整理して書かれています。

2

『不登校をめぐる55の質問』

この冊子は平成23年10月に刊行されたものです。この冊子には学園が17年におよんで不登校支援の実践研究をしてきた、そのいわばエッセンスが収録されて、不登校支援のすべてが、Q&A方式で掲載されています。教育現場で不登校支援に関わっている先生方は勿論のこと、保護者にとっても、具体的指針になる内容になっていて、これまで非常に好評をいただいているものです。



神出学園は学園が有している豊かな環境や施設、そして優れた人的資源を学内外に開放する諸活動を、この20年間多岐にわたり、さまざまな分野で試みてきました。以下はその主な活動内容です。

学園のスタッフによる県内の小・中・高校職員対象の研修

学外の学校や関係諸機関の職員を対象に、年間2回「不登校支援への理解と対応」および「事例研究」などについて、1日学園の施設を開放し、研修を行い、例年好評をいただいているものです。

学園の蓄積を学外に発信するオープンキャンパス

この活動は、年間2回学外の親、教員、教育関係機関の方を対象に、不登校に関する実践的なかわりについて、学園長ならびにスタッフによって講演や相談会を行い、多数の参加者に好評をいただいている活動です。

学園のスタッフによるアウトリーチ講義

この活動は例年7月から翌年3月までの期間に、教育事務所、県立市立学校、市町村教育委員会などへ相当数の回数、「不登校支援について」スタッフが講義を行っているものです。

本学園の社会事業としての臨床を学ぶ大学生の実習受け入れ

臨床心理学を学ぶ大学院生の臨床実習を受け入れています。若干名の学生に、学園の「一日交流体験」や「学園行事」などに、支援者として入り、臨床を学んでもらう事業です。

小学校および高校との連携事業

明石市立貴崎小学校3年生と学園の子どもの交流会で、学園の子ども達が受け入れの準備をし、学園のビオトープを中心舞台にして、動物とのふれあい、ビオトープの生き物の観察などすべて学園の子ども達が準備し、小学生に好評の活動です。また県立夢野台高校は教職をめざす教職類型の高校で、28名が参加し、午前は「ストレスマネジメント」学習、午後はアニマルセラピーなどを学び、教育というものの基本を学ぶ学園の活動です。

楽農生活センターとの連携

隣の楽農生活センターは農業にかかわる様々な仕事をしていますが、センターのご理解をいただき、学園の子ども達はグループに分かれて、夏野菜の収穫、キノコの収穫、ジャムづくりなどを体験し、今後もますます連携を進めることにしている活動です。

ひきこもり支援の「1日交流体験」活動

今やひきこもり問題は深刻な問題であり、その数は県内でも推定1万人とされています。こうした問題に対して神出学園の自然環境、施設、人的資源を活用して、何か支援活動ができないかを考え、4年前の平成21年から始めたのが「1日交流体験」事業です。

この事業は神出学園の本科生が木曜日に帰宅するので、その裏を活用するという意味もあり、金曜日に設定された事業です。開設日は月平均3回とし、金曜日に行っています。年間25回実施しています。対象は県内に在住する15歳から35歳までのひきこもり等の状態にある人達です。

1日のプログラムを午前の活動と午後の活動に分け、午前は個人の選択プログラムで「動物ともふれあい」「スポーツ」「ガーデニング」「ミュージック」「進路学習」「フリープログラム」などです。午後は集団プログラムです。それもゆるやかな集団の活動になっています。「野菜の植え」「工作」「イチゴ狩り」「イチゴ大福づくり」「買い物体験」「ポーリング」「じゃが芋収穫」「工場見学」「夏祭り準備」「学園祭作品づくり」などです。

これまでの参加者は、トータルでおよそ110名を越えています。

こうしたひきこもり者への支援活動に対する参加者の経過を見ますと、はじめは不安などで参加を躊躇する傾向も見られましたが、回を重ねる内に、徐々にコミュニケーションが出来るようになり、リピーターも増え、参加者が相互に関わる風景も多く見られ、社会性が身についていく様子が見られました。

今後こうした活動をさらに充実するよう学園としても一層の努力を惜しまないつもりであります。



おわりに

神出学園の20年を振り返りながら、本冊子の原稿を書いて参りました。思えばこの20年、他に前例のない公的不登校支援の学園の運営は、日々試行錯誤の連続でありました。こうした20年を冊子にまとめるに当たっては、多くの躊躇がありました。それは学園の不登校支援という果てしない営みは、冊子などにまとめるほど単純なものではないと思ったからです。しかし20年を節目に、あえて大胆に学園の支援のエッセンスを世に打ち出すのも、学園の先駆的的使命と考え、「大胆に、そして可能なかぎり分かりやすく」を念頭にそのエッセンスを冊子という形にまとめることとしました。したがって、本冊子の各頁の奥には表現しきれない多くの情報が潜んでいます。どうか読者のみなさん！本冊子にはこうした奥行きがあることをご理解いただければ、この上なく嬉しく思います。

年々子ども達の抱える問題が複雑化する中で、本冊子がお役にたつことを心から願いつつおわりの言葉といたします。

本冊子の発行に当たって多くの方にお世話になりました。

編集全般にわたってお手伝いいただいた神出学園非常勤講師の森下徹様、デザイン全般を担当いただいたデザイナー(Serendip Web Studio)の井上智博様、多くのイラストを提供していただいた神出学園非常勤嘱託の荻野晴加様にこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。

兵庫県立神出学園長 小林 剛
兵庫県立神出学園校長 藤田浩毅





2013年11月3日 発行

発行：兵庫県立神出学園

〒651-2304 神戸市西区神出町小束野30番地

TEL: 078-965-1122 FAX: 078-965-1123